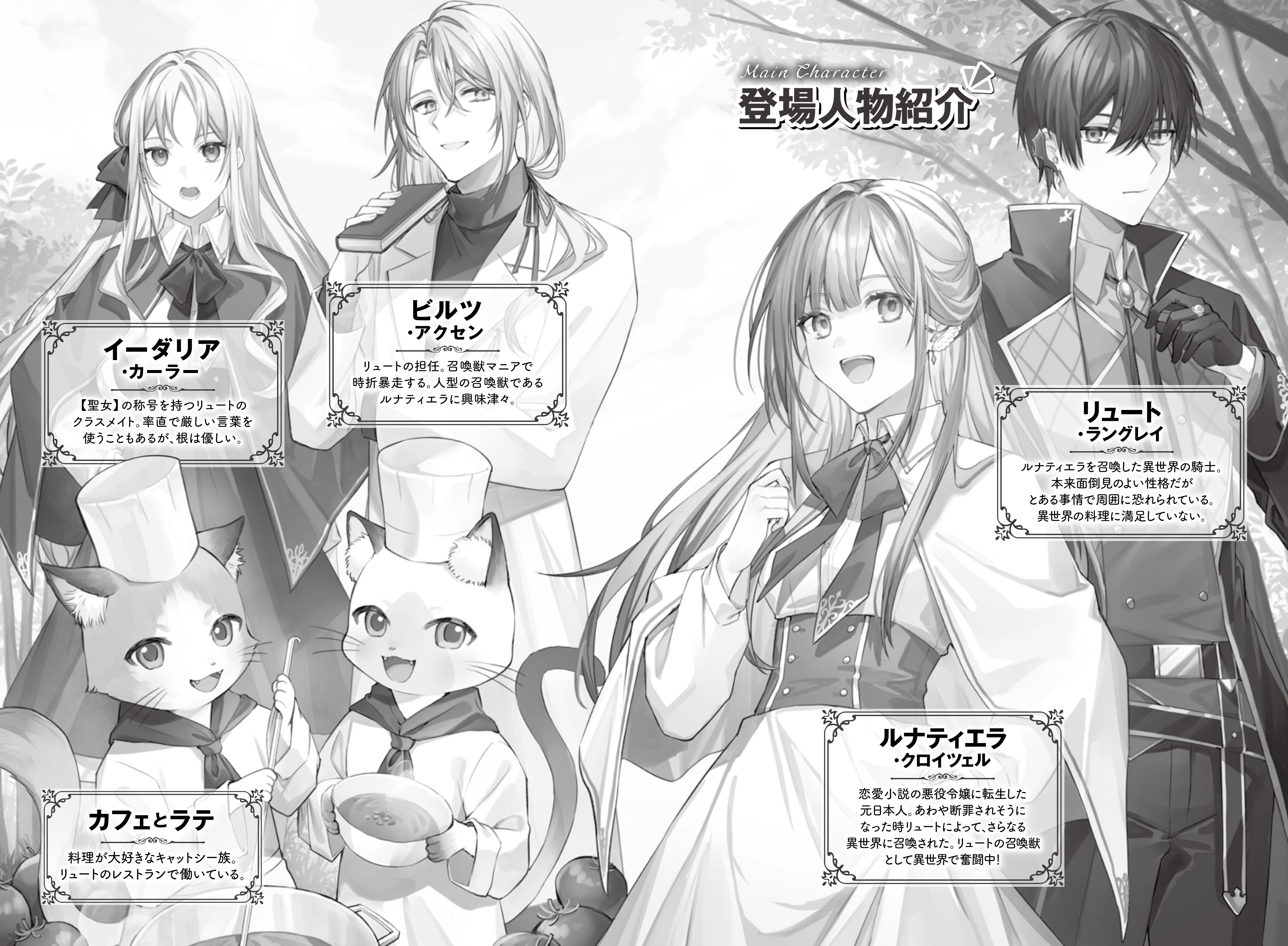
悪役令嬢の次は、召喚獣だなんて聞いていません！


Main Character
登場人物紹介
イーダリア・カーラー
【聖女】の称号を持つリュートのクラスメイト。率直で厳しい言葉を使うこともあるが、根は優しい。
ビルツ・アクセン
リュートの担任。召喚獣マニアで時折暴走する。人型の召喚獣であるルナティエラに興味津々。
リュート・ラングレイ
ルナティエラを召喚した異世界の騎士。本来面倒見のよい性格だがとある事情で周囲に恐れられている。異世界の料理に満足していない。
カフェとラテ
料理が大好きなキャットシー族。リュートのレストランで働いている。
ルナティエラ・クロイツェル
恋愛小説の悪役令嬢に転生した元日本人。あわや断罪されそうになった時リュートによって、さらなる異世界に召喚された。リュートの召喚獣として異世界で奮闘中!

プロローグ

「卒業パーティーのこの場を私的に借りることを、まずは皆に詫びたい」

先程までの和(なご)やかな様子から一転した雰囲気で、このグレンドルグ王国第二王子であり、私の婚約者のセルフィス殿下はそう言い放った。ついで私を睨みつけるが、その視線は婚約者に向けるものとは思えないほど冷たい。

『その時』が来る可能性があると理解はしていたものの信じたくなかった瞬間が訪れた絶望を、なんと言い表したらいいだろうか――

「ルナティエラ・クロイツェル嬢、前へ」

常とは違う彼の硬い表情と声に、誰もが息を潜(ひそ)めて成り行きを見守っている。

この場に来ている父と母が動揺することもなく此方(こちら)を見ている様子から察するに、事前になんらかの報せを受けていたのかもしれない。

私を忌み嫌っているはずの両親が、卒業を祝うためのこの場所に来るなどおかしいと思っていたが、その理由を理解して唇を噛みしめた。

やはり、この世界はミュリア様のためにあり、私は彼女にとって邪魔者――『悪役令嬢』であるということなのだろう。

「ああ、やっぱり」という諦めにも似た苦い思いが胸に広がる。ただ形容しがたい複雑な思いを抱きながらも、平静さを保つくらいの余裕はあった。

普通の令嬢であればいつもとは違う婚約者の様子に狼狽え、ただ震えていたに違いない。

心の内に広がる絶望を噛みしめ、ただ目の前の状況を見つめる。

冷たく見下ろしてくるセルフィス殿下や感情の読めない暗い瞳で見つめてくるアルバーノ様、その後ろで守られるようにして立っているミュリア様を順々に見つめ、なんとも言えないむなしい気持ちがこみ上げてくる。

そして私は、『結局はこうなってしまうのか』という気持ちとともに思い出す。

すべての始まりである、あの日のことを――

§§・✤・❀・✤・§§

それは、去年のことだ。私たちの学生生活が最後の年になり、ようやくセルフィス殿下との婚約が本決まりになった頃、一人の少女が学園へ編入してきた。貴族たちの通うこの学園では編入の生徒は非常に少ない。

物珍しさも手伝って、少女を一目見ようと、多くの生徒が彼女の元へ足を運んでいた。かくいう私も好奇心を抑えきれずに覗きに行った一人である。

その日の天候は雨だった。令嬢として覗き見をするなんてはしたないけれど、こんな天気であれば他の学生たちは来ないだろうと高をくくり、件の少女がいる中庭をこっそりと物陰から覗き見た。

少女は降り注ぐ雨をものともせず、可憐に美しく立っていた。

小柄な体に春を連想させるふわふわとしたパステルピンクの長い髪、深緑の瞳は眩しいくらいに光り輝いている。

なぜかその傍らにいた婚約者であるセルフィス殿下も、彼女のような愛らしい少女から笑顔で話しかけられて悪い気はしないのだろう。私には向けないような優しい笑みを浮かべ、とても親しげに話をしている。

キラキラ輝く彼女とセルフィス殿下の様子を見ていると言葉にできない気持ちが湧き上がった。なんともいえない気持ちで視線を逸らすと、校舎の分厚い窓ガラスに映った己の姿が目に入り、さらに惨めになってしまう。

濃い空色の長い髪の奥から、雨の中で黄金の瞳が自信なさそうに此方を見ている。家でも両親から厭われる見た目だ。少女のような華は微塵もなく、外出をあまりせず暗い部屋の中にこもっていることが多いためか、肌は病的なまでに青白い。

沈みそうな気持ちを誤魔化すように再び編入生へ視線を戻した瞬間、飛び込んできた光景に息を

呑んだ。
周囲に冷たい雨が降っているというのに、彼女の周りだけスポットライトが当たるかのごとく厚い雲の隙間から光が降り注いだのだ。
なんて不可思議で神秘的なのでしょう——って、スポットライト？
不意に浮かんだ言葉の意味を理解できない自分と、それが適切な表現であると考えている自分がいる。奇妙な違和感を覚えると同時に、激しい頭痛が襲ってきた。
何かを警告するかのような痛みに耐え、なんとかこの場から離れようと踵を返す。
その時だった。視界の端で少女が濡れた地面に足を取られたのか、バランスを崩した。それをセルフィス殿下が支え、きらきらと陽の光が美しく二人を照らす。
このシーンを、私は知っている……そうだ、これは小説の中でセルフィス殿下と『ヒロイン』のミュリアが、お互いを意識し始めるきっかけとなったシーンだ——
そんな言葉が頭に自然と浮かび、さらに頭痛が激しくなる。
光が射す中で微笑み合う二人と対照的に、酷い痛みに吐き気すら感じ始め、私は部屋へ戻ろうと一歩を踏み出した。その瞬間グラリと意識が揺れる。
闇にのまれる感覚に不安を覚えて助けを求めるように腕を伸ばす。
『主人公』のミュリア様とは違って、『敵役』の私を誰も助けてはくれないだろう。そんなことを考えたのを最後に、私は意識を失った。

目覚めると寮内の自室にいた。聞くと、ベオルフ様——この国の騎士団長を務めるアルベリーニ家の長男が私を連れ帰ったそうだ。
その後、医師からは過労と診断されたが、おそらく前世の記憶と現世の記憶の混濁が精神に大きな負担をかけたため、原因不明の発熱という症状が出たのだろう。しばらく起き上がることもできないまま、呼び起こされた記憶と現実が入り混じる酷い悪夢にうなされる日々が続いた。
その療養期間に見舞いへ来てくれたのはベオルフ様だけで、セルフィス殿下は一度も姿を見せなかった。その噂はどこからともなく広がり、私は「お飾りの婚約者」だと今まで以上に周囲から軽んじられる存在になった。
熱が微熱程度に下がった頃には記憶の統合も落ち着き、セルフィス殿下が選ぶのは私ではなくミュリア様だと理解したので、噂に落ち込むことはなかった。
それよりも前世の記憶を一部取り戻したことにより、この先に訪れるだろう未来を知り、私は恐れおののいていたのである。
前世の私は、この世界に酷似した『君のためにバラの花束を』という小説を親友に薦められて読んだことがあった。主人公のミュリアがセルフィスという王子と出会い、数々の苦難を乗り越えていくという王道ラブストーリーである。
その中でルナティエラ・クロイツェルは、惹かれ合うミュリアとセルフィスを邪魔する、巷では『悪役令嬢』と呼ばれる存在で、婚約者であるセルフィス殿下への愛ゆえに狂っていく役どころで

あった。
　一見、清楚で控えめな令嬢の風貌をしているのに、実は激情に駆られやすいキャラクターだったが、そのギャップがまたいい味を出しているのだと前世の親友は熱く語ってくれた。しかし、私は彼女とは真逆に、ルナティエラというキャラクターを恐ろしく感じた。
　セルフィス殿下を愛するが故に、ヒロインの彼女を陥れ、追い詰め、苦しめる。それこそ手段を選ばず、己の破滅すらも顧（かえり）みない。
　だから、自分こそがその悪役令嬢であるという記憶を取り戻してからは、セルフィス殿下やヒロインを避け、接触も最低限で済ませた。愛という感情に溺れ、破滅するほど狂いたくなどなかったから――

§§・✿・❀・✿・§§

　そんな風に、この日が来るのを恐れていたというのに――と心の中で呟き、目の前で自分を糾弾（きゅうだん）するセルフィス殿下を見つめる。
『君のためにバラの花束を』の断罪シーンに酷似しているこの状況を、現実として受け入れるのは難しい。何しろ私はミュリア嬢に近付きもしたことがない。全員がお芝居でもしているのではと現実逃避をしたくなるが、どれほど否定しようとも、これは紛れもない現実だった。

　今更考えても意味がなく、後の祭りだと分かっていてもそんなことを考えてしまうのは、目の前に迫る破滅に恐怖を感じているからだ。すぐそこまで迫ってきている死の気配が怖くて仕方がない。
　しかし、物語にあったような狂わんばかりの愛情をセルフィス殿下に抱くことも、共に生涯を歩んでいきたいという気持ちを持つこともできなかった私には、何度考えても二人から距離を取るという選択肢しかなかった。
　これまでのことを振り返っている間、私が行（おこな）ったという罪が朗々と読み上げられていた。ミュリア様の持ち物を隠したという小さなことから彼女の誘拐まで、覚えのない多くの罪を私が犯したことになっている。
　どうしたらよいのだろうと考えても妙案が浮かぶはずもなく、目を伏せたまま立ちつくしていると、セルフィス殿下が私の前に進み出た。
「ルナティエラ・クロイツェル嬢。君がミュリア嬢を虐（しいた）げていたことについては、双方に認識の違いがあるやもしれない。しかし、最後に述べられた誘拐は未遂とはいえ重罪であり、証拠も揃っている。君の犯した罪を考えれば、私との婚約は破棄する以外にない。罪を悔い改め謝罪するならば温情をかけることもできるが」
　セルフィス殿下の青い瞳がわずかに揺れているのを見て、私は驚きで息を呑んだ。
　物語にはなかったセリフは、もしかすると彼が心から感じていることなのだろうか。
　そうだとしたら、私が幼いころから積み上げてきたものは無駄ではなかったのかもしれない。物

語の中のセルフィス殿下は情など一切感じさせることはなく、ルナティエラを罪人として扱ったのだから……
　わずかに息を吸い込んで顔を上げる。
「……殿下のお心遣いには感謝いたします。ですが、わたくしには訴えられた罪を犯した覚えは一切ございません」
　折れそうな心を必死に支え、震えそうな声でなんとかそれだけは言うことができた。
　彼の『温情』に縋って偽りの罪を受け入れるよりも、恐ろしい現実を前にしても折れない心を抱き、最後まで無実を訴え続けよう。その果てに死が待っていようとも、最後の瞬間まで諦めたくない。
　なぜこんな強い思いが湧いてくるのかわからないが、自分の中の私が叫ぶのだ。
　私らしくあれ……と——
　私の言葉に、セルフィス殿下の顔が苦く歪んだ。
「ルナティエラ・クロイツェル嬢……残念だ……」
「犯した覚えのない罪を認めることはできません。己の命が惜しいばかりに、やってもいない罪を認めるなど愚か者のすることです。わたくしは、先程述べられたような罪を犯していない。それが真実です」
　侯爵令嬢として恥ずかしくない、毅然とした態度で言えただろうか。

　セルフィス殿下の背で、ミュリア様の口元が歪んだのが見えた。恐らくは、彼女によって証拠や罪がでっちあげられたのだろう。すべてが彼女の計画通りということが悔しく、誰にも信じてもらえないことに心が痛むが、今更どうしようもない。
　しかし、罪状にあった『私がミュリア嬢を虐げた』という言葉には思わず苦笑が浮かんでしまいそうになる。
　セルフィス殿下は双方に認識の違いが——と言っていたけれども、これまで両親からの愛情もなく冷遇され、ないものとして扱われて虐げられる痛みを誰よりも知っている私が、どうして他者を虐げられるのだろう。
「本当に、いいのか？」
　私にだけ聞こえるような小さな声でベオルフ様が問いかけてくれたが、それに返す言葉が見つからずに俯くしかなかった。今、声を出せば泣いてしまいそうだ。心を奮い立たせても震えてしまう手を必死に隠していたのが、ベオルフ様からは見えていたのかもしれない。
　覚えのない罪に、捏造された証言と証拠が揃っているのだから逃れようがないし、誰一人として味方にはならない現状は誰よりも理解している。しかし目の前に死という道しか残されていないのだと分かっていても、命を永らえるために殿下に縋り、彼らの言う罪を認めたくはなかった。
　私の決意が変わらないと理解したのだろう。セルフィス殿下がわずかに首を振る。
「ルナティエラ・クロイツェル侯爵令嬢を、ミュリア・セルシア男爵令嬢の誘拐未遂容疑で捕ら

えよ」
その言葉で騎士たちが動き出す。それに伴(ともな)い、背後にいたベオルフ様も距離をとったことが気配で分かった。
結局、物語の結末は変わらなかった……という絶望がじわじわと胸の内に広がる。
けっして小説にあったような悪事など働かなかったのに、覚えのない犯罪行為を捏造(ねつぞう)された上に国外追放か死罪となるなんて。
前世の親友がこの場にいたら「納得がいかない！」と怒鳴り込んできたかもしれない。そう考えたら、絶望的な状況下でも少しだけ笑うことができた。
今世において彼女のような得がたい友を作ることはできなかったけれど、彼女はいつも私の心の支えだった。感謝してもしきれない。
いや、他にも自分を支えてくれた人はいたような気がする。しかし、それを考えようとすると頭に霞(かすみ)がかかったようにぼやけてしまう。頭を振り、今は考えても分からないことへ意識を向けるのをやめ、前世の親友の顔を思い出して自らを勇気付けた。
「ルナティエラ様……どうして……こんな……」
嘆き悲しむミュリア様の声が聞こえるが、どう見ても嘘泣きだ。うっすらと浮かんだ笑みを隠すように手で顔を覆っている彼女は、私の目から見たら悪女にしか見えない。
しかし、外見は可憐な乙女である彼女の泣く姿は男たちの心をかき乱すのか、セルフィス殿下は

眉尻を下げて彼女の肩に手を回していた。しかし、もはやその姿を見ても心は痛まない。
二人を眺めていると金属がぶつかり合うような重い音がした。武装した騎士が近くまで来たのだと理解し、捕らえられる瞬間を大人しく待つ。
すべてが終わったのだと唇を噛みしめる。結末は変わらなかったが、覚えのない罪に絶望するよりは毅然(きぜん)とした姿でいようと、下がっていた視線を上げて前を見据えたのだが——いつまでたっても騎士たちが私を捕らえる気配がない。
そればかりか周囲が私を見てざわめいていることに気づく。目の前で仲睦まじそうに寄り添っていたセルフィス殿下とミュリア様までもが、驚愕の面持ちで此方(こちら)を見ていたのだ。
今更、何を驚くことがあるのだろうと周囲を窺(うかが)うと、自分の足元が光っていることに気が付いた。
——え？　こんなシーンはなかったはず……
ベオルフ様の鋭い声が、何かに遮断されているように遠く感じる。
私の周囲には光の粒子が漂(ただよ)っていた。その発生源となっている私の足元にはいつの間にか金色の文字がびっしりと浮かんでおり、複雑な文様を描きながら広がっていく。そして、ふわふわと浮かぶ淡い輝きは数を増やしたかと思うと、数秒の後、弾(はじ)けるように消えた。
次の瞬間、黄金の光が床から天へ昇っていく——言葉も出ないほど不可思議な光景に思わず息を呑む。
どうすればいいのか分からず混乱する頭をなんとか動かして、光から抜け出す方法を考えている

と、目の前に一人の男性が現れた。

その人は、艶のある漆黒の髪と茶色の瞳という懐かしい色合いを持った青年で、グレンドルグ王国に多い彫りの深い顔立ちではなく、東洋人らしい顔つきをしている。

その場にいた全員に彼の姿が見えているのか、『主神オーディナル様だ！』と声が上がったが、その声もくぐもって聞こえた。

前世の記憶を思い出した私にとって馴染み深い黒髪も、この世界の人間には特別な意味を持つ。

この世界を創造した神オーディナルは、世界の繁栄を願い、特殊な力を持った御使(みつか)いをごく稀に誕生させる。そして、その者は例外なく、創造神オーディナルと同じ漆黒の髪色だったのだ。

それ故に、人々はその御使(みつか)いを『創造神オーディナルの愛し子』と呼び、この地に降臨した神のように崇(あが)め奉(たてまつ)ったと書物には書き記されていた。

しかし、私には目の前の彼がオーディナル様だとはどうしても思えなかった。此方(こちら)をまっすぐ見て凛々しくも優しく微笑む姿は、どちらかというと前世の親友の姿と重なって見える。

どうしたらいいのかわからず、しばらく無言で見つめ合っていると、彼がまるで此方(こちら)へおいでと言うかのように私へ向かって手を差し出す。

目の前に差し出された大きな手に、私は自然と自らの手を重ね合わせた。

それと同時に黄金の輝きが増し、今まで見えていた景色が光とともに遠くなる。

――『悪役令嬢』のルナティエラは神々しい輝きに包まれ、その場から姿を消した。

後にこの出来事が『神の花嫁』として広く人々に語り継がれ、新たな伝説となることを、この時の私はまだ知らなかった。

§§・✽・❀・✽・§§

最後にセルフィス殿下の呼ぶ声が聞こえた気がしたけれど、それすらもう遥か彼方。

金色の光は私を包み込み、急速に浮き上がった。漆黒の空間に浮かぶ色鮮やかな星の煌(きら)めきを飛び越え、ひたすらに先へと突き進む。これはどこに向かっているのだろうか。

まさか、ルナティエラになってジェットコースター気分を味わうとは思わず、三半規管が悲鳴を上げる。だんだん目眩がしてきて、乗り物酔いのように気持ちが悪くなる中、一際大きな煌(きら)めきが目の前で弾(はじ)けた。

その瞬間、長く続いた乱高下から解放され、地に足が着いたことに安堵する。そして、いつの間にか閉じていた瞼をゆっくり開くと、目映(まばゆ)い光の中に一人の青年が立っていた。彼は驚いたように私を凝視している。

ここは一体どこなのかも分からない状況なのに、なぜか私の視線は自然と彼に吸い込まれてしまう。

最初は、あの時手を差し伸べてくれた青年かと思ったのだが、外見が違うので、どうやら別人のようだ。

彼の濡れ羽色の髪は先程見た青年と同じ色合いだが、その瞳の色はまったく違う。虹彩は青く鮮やかで、瞳孔の周りを彩るように、明るい金色や黄色からオレンジのグラデーションがわずかに見える。その不可思議でいて地球を思い出させるような美しい色合いは――確か前世ではアースアイと呼ばれていたはずだ。いつまでも見ていたくなるほどの力ある輝きを放っている。

――でもやはり、先程見た男性にどことなく似ているような……？

そこまで考えて、自分が奇妙なほど目の前の彼に興味を覚えていることに気が付いた。

なんでしょうか……この感覚は――、そして、ここはどこなのでしょう。

「あ……あの……」

私が考え込む間にも青年の視線は私に注がれていた。さすがに耐えきれなくなり声を出したが、その後の言葉が続かない。

自然と彼の顔に向かってしまう視線を引きはがし、彼の服装や周囲に向ける。すると、服装からして、違和感があった。

彼の服装は私のいたグレンドルグ王国の貴族たちが着ているものよりも装飾は少ないが、どこか武骨で未来的だ。それだけではなく彼の肩越しに見える真っ白な壁は、金属特有の光沢があり、歪みの一つもない。

ここはどうやら呆れるほど広い室内――それも、金属壁に囲まれた何もない空間だと理解して目をみはる。石壁が当たり前だったグレンドルグ王国や、周辺諸国ではありえない光景だ。

ま、まさか……ですよね？

心臓が激しく脈打ち、一つの考えに行き着こうとしているのを阻止するように、ズキリと頭に痛みが走る。

「あの……！」

……まさか……ここは違う世界……？　いや、もしかしたら日本に戻ってきた……とか？

ありえそうでありえない考えを頭に浮かべながら声をかけると、目の前の青年がようやく動き出した。

「えっと……君は俺が召喚したん……だよな？」

はて？『召喚』とは？　さらなる疑問が頭をよぎるが、そんな疑問は些細なことだと感じてしまうほど彼の声は不思議と耳に心地よく響く。次の言葉が見つからずただ呆然とお互いを見つめ合っていると、いきなり鋭い音が飛び込んできた。獣の吼える声ともけたたましい鳥の鳴き声ともつかない音に驚き、弾かれたように視線を向けると、真っ赤な髪の男性が此方へやってくる。

彼は、私と青年を交互に見て目を輝かせたかと思うと、いきなり叫んだ。

「リュート・ラングレイ！　どうやら貴様も召喚に成功したようだな。ちょうどいい。腕試しといこうかっ！」

「危ないっ」
　青年が私の体を横抱きにして、その場から大きく跳躍する。
　同時に爆音が耳をつんざいた。
　思いがけない熱風にドレスが煽られ、怖くて身を固くしていると、青年が低く「あの野郎」と呟く。
「悪い、本当は詳しく説明してやりたいが、どこかの馬鹿のせいで、それどころじゃなくなった。どう見てもアンタ、戦える見た目じゃないし……とりあえず、簡単に説明する。アンタは俺が召喚したから、現状『俺の召喚獣』ってことになる。もちろん嫌だというならすぐに元の世界へ帰すから、今だけ、ちょっとじっとしていてくれるか？」
「は、はい……！」
　青年に尋ねられ、訳が分からないながらも必死に頷くと、わずかに微笑まれた。それにほっとして、改めて周囲を見る。どうやら私と青年は複雑な文字や文様が刻み込まれている床から黄金の輝きが溢れている場所にいたようだ。
　今は黒く焦げてしまっている床に、先程まで立っていたと考えるだけで恐ろしくなり、彼の首筋にしがみつく。
　すると「そのまましっかり掴まっていてくれ」と頼まれた。
　手を離さないように力を込めたのを確認した彼は頷き、炎を繰り出す相手に向かって叫ぶ。

「やめろ、ガイアスッ！　まだ彼女とは契約してねーんだよ！　しかも、彼女はどう見ても戦える召喚獣じゃないから諦めろっ！」
「御託はいい！　貴様自身が戦えばいい話だっ」
「アホか！　オイ、ガーディアン！　未契約および非戦闘召喚獣に対する戦闘行為は、学園内だとしても召喚獣保護法に引っかかるはずだろうが！　さっさと止めろ！」
分からないことばかりだが、青年に戦う気はないのだろう。しかし、ガイアスと呼ばれた相手は全く聞く気がないようで、攻撃の手を止めない。何度か爆発音が鳴り響き、その度に青年が身を翻す。
近くで炎が幾度となく炸裂したが、青年が何かをしたのか熱さは一切襲ってこなかった。
「人の話をちゃんと聞かねーで好き勝手しやがって……いい加減、イラついてきたな」
唸るように呟かれた言葉は、物騒な色を宿して低く響く。
苛立ちを募らせながらも彼の集中は途切れることなく、次々と襲い来る炎を軽やかな動きで右に左に上に下に避けている。
先程のジェットコースターよりはマシですけれど、これが続くと酔いますよ⁉
揺れる視界の中、真っ赤な髪の襲撃者の隣で火を纏ったトカゲのような生き物が口から炎を吐き出すのが見える。
これでこの世界が別世界なのが確定ですっ！　こんな炎を吐く生物なんて、私の世界には存在しませんでした！　グレンドルグ王国は日本と同じような生態系に加えてちょっぴり不思議な神の御使いがいるくらいでしたもの！
私が心の中でそんな言葉を叫んでいたら、火トカゲが一際大きな炎の塊を放った。
どうやら火トカゲは隣の赤髪の男の指示で動いているようだ。
再び青年がその炎を避けると、炎は先にあった床に命中し、もうもうと黒い煙が立ち上る。
「痛っ……！」
それが目に染みて、思わずぎゅっと目を閉じる。瞬きを繰り返すと生理的な涙が零れ落ち、ごしごしと手の甲で目を擦ると、不意に肌寒さを感じた。
部屋の温度が二、三度は確実に下がったような気がするのですが……？
見上げると、彼が奥歯を強く噛みしめ、相手を射殺さんばかりに睨みつけている。
「オイ、ガーディアン。これ以上ノロノロしていたら、俺がアイツを全力でブッ飛ばすぞ」
その迫力に押されたように火トカゲの炎の勢いが衰える。襲撃者も火トカゲに指示を出せず、硬直しているようだ。
すると部屋の天井近くに、鈍色に輝くバレーボールほどの球体が姿を現した。ついで真ん中についている大きなレンズが青から赤に変わり、明滅する。
『リュート・ラングレイ訓練生に召喚された召喚獣は未契約であり、現時点では戦闘系召喚獣ではないと判断されました。これ以上の攻撃は厳罰対象になりますが、攻撃を続けますか？　ガイア

ス・レイブン訓練生』
あれが『ガーディアン』でしょうか？
襲撃者はいまいましげに舌打ちをした後、「面白くねぇ！」と言い捨てると真っ白な壁へ向かって歩き出す。あわやぶつかるというところで、襲撃者が左手の甲を壁にかざすと同時に真っ白な壁が開閉し、何事もなく外へ出て行ってしまった。
あれ？　……あれは自動ドア？
目をこらして見てみると、壁に見えていた場所にまっすぐな継ぎ目のような線が入っており、おそらくそれが扉と壁の境目なのだろう。そのわきには、青白く輝く小さな球体が設置されている。なんとも近未来的な光景だ。
落ち着きを取り戻して、辺りを見渡すと、グレンドルグ王国……いや、ルナティエラの世界どころか、前世の日本でもありえないほどの技術を持った世界なのだとハッキリ分かる。
未だ金色に点滅する床の文字列が目に入る。先程の『異世界』という考えは間違いではなさそうだと実感すると同時に、思わず額に手をあてた。
つまり私は、あの魔法陣みたいなものによって別世界へ飛ばされた――召喚されたということになる。
詳しい説明をしてもらったほうがいいだろうと、未だ私を横抱きにしている青年を見上げる。
「大丈夫か？」

すると私が問いかけるよりも早く口を開いた彼は、私を降ろすと心配そうに顔を覗き込んでくる。
気づかわし気に問いかけられて、思い出したように襲いかかってきた乗り物酔いの気持ち悪さに口元を押さえると、彼は優しく背中を擦ってくれた。
その手の感触は、彼の声や外見のように私の気持ちを一瞬で和（やわ）らげた。
視線を上げて顔を見ると、さらに不自然と思えるほどの安堵が胸に溢れる。
……そういえば、この不思議な感覚も……なんなのでしょう。
何もかも分からないことだらけで混乱する頭を抱えていると、能天気な声が部屋に入ってきた。
「大丈夫ですか？　リュート・ラングレイ。本当に君はガイアス・レイブンに睨まれているのですねぇ」
「向こうが勝手に噛み付いてくるんだよ」
「君が悪目立ちをして敵が多いことが理由ではないですかねぇ。また目立つようなこともやらかしたようですし……」
クセのあるくすんだ金色の髪に、糸のように細い水色の目。部屋に入ってきた白衣の男性は細い目をさらに細めて私を見ていた。その目の奥には隠し切れない好奇心が滲（にじ）んでいて、なんとも嫌な感じだ。
どなたかは存じ上げませんが、そのような不躾（ぶしつけ）な視線は女性に嫌われますよ。
「ビルツ・アクセン。仮にも教師なんだから、もうちょい色々考えて行動したらどうだ。女性に向

ける視線じゃねーだろ」
身を竦めていると、彼がスッと体をずらして視線から守ってくれた。青年——リュート様は、「大丈夫だ」というと、私を安心させるように手を包み込んで握ってくれた。触れた場所からじんわりと流れ込んでくる熱に驚いたが、とても安心できる。
そのままの状態でいると、白衣の男——アクセン先生が興味深そうに此方を眺めていることに気が付き、慌てて手を離した。
教師ということは、先程の騒ぎを聞きつけてここにやってきたということなのだろうか。アクセン先生を見上げると、彼はにこにこと手を振り、リュート様に視線を移した。
「人型の召喚獣は大変珍しいですからねぇ。意思疎通はできますか？」
「まだ状況説明もできてねーし、いきなりの襲撃で怖がらせちまっている。ちょっと時間をくれ。もしもの時は、『送還の儀』に入らないといけねーからな」
「送還……アレでできるでしょうかねぇ」
アクセン先生が指さす方向にあったのは床を破壊こそしなかったが、黒焦げで文字が半分以上消えてしまった魔法陣のようなものの残骸。さっき見た時は点滅していた光も今や消えている。それを見た瞬間、リュート様の顔が絶望に染まった。
「嘘だろ……」
「まあ、送還は無理でしょうねぇ、召喚陣を壊されてしまっていますから」
「あのヤロウ！」
「まあ、君にも彼女にも残念ですが、半年後の試験を彼女と共に参加せざるを得なくなったということですねぇ。まあ、これも運命というやつでしょうねぇ」
楽しげにそんなことを言われてしまい、私たちは思わず互いの顔を見合わせた。
えっと……とりあえず、この世界はなんですか？　しかも、召喚獣ってどういうことですかっ⁉
悪役令嬢が召喚獣とか、意味が分かりません！

第一章　悪役令嬢が召喚獣

その後、リュート様は「時間が欲しい」とアクセン先生に告げ、私を連れて白い金属で覆われた部屋から出た。どこか残念そうだったアクセン先生の視線を思い出して身震いする。

セルフィス殿下の婚約者であったため、今までも様々な視線を投げかけられてきたが、あんな奇妙な視線は初めてだった。まるで私を珍しいおもちゃか何かだと思っているような視線である。

そんな私の様子を見て、リュート様が申し訳なさそうに私の背中に触れた。

「悪いな。あの教師――アクセンは召喚獣馬鹿で有名なんだ。話しかけられても適当にあしらうから、嫌なら俺の背中に隠れていたらいい」

そんな提案をしてくれる彼は、本当に優しい人なのだろう。

王国内は針の筵だったので気遣いに溢れる対応は久しぶりだ。どう返答したらいいか分からず、内心焦っていると、彼はさほど気にした様子も見せずに話を続けた。

「とりあえず、話ができる場所へ移動しようと思うから、ついてきてほしい」

「わ、分かりました」

少々緊張しながらも頷いてみせると、彼は少し安堵したように表情を緩めた。

長い廊下を歩き、ゆっくりとした足取りで『話ができる場所』へ向かう。

先程の戦闘で体が火照っているのか、それとも普段からそうなのか、襟元を緩めてホッと息をついている姿や、顕わになった喉元がやけに色っぽい。チラリと見ただけで頬が熱くなってしまった。

へ、変ですね……照れるところだったでしょうか。

「本当に痛いところや怪我はないな？」

「お気遣いありがとうございます。なんともございません」

「そうか、ならいいんだが……緊張がほぐれて痛みを感じることもあるから、その時は遠慮なく言ってくれ」

高身長の彼に見下ろされる形で言われ、コクコク頷いていると頭を優しく撫でられてしまった。

子供扱いだろうか……と考えていたのだが、その時になって違和感を覚えた。

私の背はグレンドルグ王国の中では高く、踵のある靴を履くとセルフィス殿下と並ぶほどだったけれど、リュート様と比べたら低い。視線をかなり上げないと彼の顔を見ることもできないのだから、私と彼の身長差は歴然としている。

少し視線を下げると、彼が腰から提げている剣が目に入った。先程の戦いで一度も抜かれることはなかったが、かなりの重量があるように見える。それを感じさせない動きで立ち回っていたのだから驚きしかない。

そんな風に周囲を窺いながら廊下を歩いていると、もう一つ気付いたことがあった。

先程のアクセン先生ほどではないにしろ、通りすがる人たちの視線がやけに此方へ向けられるのだ。最初は場違いな私の服装に目がいっているのかと思っていたのだが、私からすぐに視線は隣へと動いている。

男女問わず、すれ違う人が彼を見ているのだ。当人は全く気にしている様子もないので常日頃からこういう視線を投げかけられているのだろう。

姿勢が正しく長身であるだけではなく、青銀色の金属と黒い革で仕上げられた頑丈そうなブーツを履いた脚も長い。彼が目立つ理由のもう一つはその服装だろう。

行き交う人の多くは白に金糸の縁取り模様が入った服を着ているのに、彼は黒地に銀糸の模様が入った騎士服のようなものを纏っている。長衣のように、後ろが長く前はスリットが入っていて、ハイネックの上着は、先程の戦闘でも汚れている様子がない。

素敵なデザインでカッコイイし、黒がとても似合っている……と考えて、また彼ばかり見てしまっていることに気が付いた。

じっくり眺められて気分のいい人はいないだろうと、慌てて視線を逸らす。

それでもついつい視線が彼に向きそうになるのを必死に堪えていると、彼が私に視線を落とした。

「説明が遅れてすまない。今俺たちが向かっているのは、特別室と言われるところだ。そこなら誰にも邪魔されることなく話ができると思う。訳の分からない状況ばかりで申し訳ないが——そこまで、とりあえず我慢してほしい」

何を我慢するのだろうかと首をひねって、はたと気付く。

現状を考えれば、疑問だらけであり不安に思うような状況でしかないはずだ。

隣を歩く彼は案ずるような視線を私に投げかけている。そんな彼に「貴方のことが気になりすぎて状況を気にするどころではなかった」とは言えなかった。

黙り込んだ私に彼は首を傾げ、数回瞬きをしてから周囲を見渡して小さく「なるほど」と呟く。

「周りの視線は気にするな。アンタはその格好だし美人だから目立つんだ……元の世界でもそうだっただろ？」

はい？　皆さんの視線は、貴方に向いているというのに気付いていないのですか？

思わず目を丸くして見上げれば、どうしたと言わんばかりの視線とぶつかり、これは無自覚だと確信してしまった。これほど顔がいい人なら、こういう視線に慣れすぎているのかもしれない。しかし問題はそれだけではない。

『美人』などと言われ慣れない言葉を耳にして、心底驚いてしまったのだ。

もしかしたら彼は目が悪いのかもしれない。それなら、自分に向けられた視線に気が付かないことも理解できると一人で納得していたら、訝しげな視線を向けられた。

視力があまりよくないから、時々眉間にしわを寄せているのですね？　あ……でも、彼が眼鏡をかけたらすごく似合うのでは——いや、そうではない。まずは返事をしなければと軽く頭を左右に振り、リュート様に向かって微笑みを浮かべた。

「お世辞でも嬉しいですわ。わたくしは、そのような言葉とは無縁でしたもの」

「は？　アンタの世界は変わっているというか……美醜に対しての認識が俺たちとは違うのかもしれないな」

　まっすぐな言葉に、思わず変な声が漏れそうになる。

　彼は本気で私が美人だと思っているということになるのでしょうか？　お世辞を真に受けるのはよくありません。

　そう自らに言い聞かせるが、嬉しくて頬が緩みそうだ。

　褒められることがあまりなかった人生だったからか彼の褒め言葉は思いがけず、甘く胸に響いた。

　そんなやりとりを交わした後、どうやら目的地に到着したようだ。彼は立ち止まると、カウンターにいる受付のお姉さんに話しかけた。

「召喚術師科五十九期生・特殊クラスのリュート・ラングレイだ。特別室を頼みたい。面会はすべて断ってくれないか」

「学生証の提示をお願いします」

「分かった」

　学生証と言われてリュート様は左手を差し出している。前世の記憶では、学生証と言えばカード型だったが、彼が左手の中指にはまっている指輪を女性に向けているところを見ると、あの指輪が学生証なのだろう。

　それから、学生証となる指輪のデータを認証する道具なのか、ジェルネイルのライトを彷彿(ほうふつ)とさせる小型の箱の中に手を入れる。

　カウンターの女性が、手元にある小さなプレートを確認して小さく頷いた。

「リュート・ラングレイ訓練生と認証しました。時間はどれくらい必要でしょうか」

「あー、すぐにビルツ・アクセンから呼び出しが全員にかかると思うから、それまででいい」

「分かりました。では、B通路五番の部屋をお使いください」

　リュート様は了承したというように頷き、私へ手を差し出した。

　受付嬢の視線を受けながら彼の手を取り、奥へと進む。

　エスコートなんていつぶりだろう。ドキドキしながら周りを見る。

　ここに至るまでの廊下もそうだったが、建物の中は全体的に白っぽい造りでとても清潔だ。私がいたグレンドルグ王国とは雲泥の差である。

　やがて、先導するリュート様が一つの扉の前に立ち止まった。それから左手の指輪を扉にかざすと、シュッと音を立てて扉が開く。思わず身を竦(すく)ませると、その姿をしっかり見られていたのか、彼が楽しげに目を細めている。

　……す、すごく恥ずかしいです！

　頬が熱くなっているのを咳払いで誤魔化すと、リュート様が室内へ入るように背を優しく押して促してきた。彼に誘われるまま、部屋の中へ入る。

学校の教室というより、病院の一室のような白い壁と床の無機質な部屋だ。
シンプルな机と椅子が中央にあり、部屋の隅には大きなスーパーの休憩所に設置されていたようなドリンクサーバーが置かれている。
席に座るように促され、彼は対面に座るのかと思いきや、サーバーの方へ歩いて行く。
「まあ、これでも飲んで落ち着いてくれ」
リュート様が差し出してくれた薄い金属製のコップの中には、いい香りの緑茶が入っていた。王国では飲めなかった懐かしい飲み物についつい嬉しくなってしまう。顔をほころばせ、お礼を言ってコップを受け取ると、彼はホッとしたように肩の力を抜いた。
こんな風に見たことのある設備を目にすると、やはりここは私の知らない日本のどこかなのではとも思えるが、その可能性は限りなく低いだろう。
襲撃者——ガイアスと呼ばれていた男性が連れていた火トカゲや、火トカゲの放った炎は、前世の日本ではありえない。
そのこともこれから聞けばいいだろう。彼が対面の席に座ったのを見届けてから、私は緑茶に口をつける。金属製のコップにもかかわらず、口当たりは滑らかで金属特有の匂いもしない。懐かしい緑茶独特の香りと甘み、苦味が口内に広がり、ほっと体の力が抜けた。
緑茶を楽しむ私の様子を窺（うかが）っていた彼は、自分が手にしていた緑茶を飲み干すとコップを置き、いささか低い声で質問してきた。

「まず、その姿から考えて中世ヨーロッパ……は、髪色からしてないな。どこかの王侯貴族というところか？」
……うん？　今、中世ヨーロッパと言いましたか？
思わず言葉もなく目を丸くした私に、彼は、あっ！　と声を上げた。
「悪い。まずは、俺の自己紹介が先だな」
コホンと咳払いをして居住まいを正し、彼が此方（こちら）を向く。地球を思い出すような美しく輝くアースアイが、私を射抜く。
「俺は、リュート・ラングレイ。この国……フォルディア王国で【聖騎士】の称号を預かるラングレイ家の三男だ。今年で二十一歳になる」
フォルディア王国……地球やルナティエラの世界でも、聞いたことがない国名だ。
つまりは、ここは私の生きてきた二つの世界とはさらに違う世界ということで間違いはなさそうだけれど、そうなると先程彼が言った「中世ヨーロッパ」という言葉が異様に思えてくる。
『中世』が存在し、『ヨーロッパ』があるというなら、ここが地球という線もまだ捨てきれない。
しかし、地球で『召喚』ということが起こり得るだろうか。確実に私の住んでいた時代ではないため、ここが未来の地球だとすれば科学の進歩が『召喚』という技術をもたらしたという話になるが、どこかのゲームでもあるまいし現実的ではない。
とはいえ、既に私の目の前で起こっている現象も非現実的だ。

情報が増え、余計に混乱した頭でリュート様の話の続きに耳を傾ける。
「ここはこのフォルディア王国の中心都市レイヴァリスにある聖都レイヴァリス学園だ。詳しいことは後で聞くことになる、と思う。今日は、俺たち召喚術師が初めての召喚獣を得るために『召喚の儀』を行っていたんだが、その最中に、妙に気になる何かを見つけたら、アンタを召喚してしまった」
つまり、あの時、私が置かれていた状況を正確に把握した上で連れてきたわけではないようだ。
やや異なる容姿だったとはいえ、あれほど鮮明な姿で此方へ手を伸ばしてきたので幻影だとは思えなかったが、そういう術なのだろう。
「説明する前にあんなことになってしまって、本当に申し訳なかった。あの男――ガイアスは後でシメとく。もちろん元の世界への帰還を望むなら、帰れるように手を尽くす。召喚陣があんな状態になっちまったら普通、同じ場所の同じ時間に戻すのは難しいが、戻す方法を知るヤツに心当たりがあるから大丈夫だ。説明もなく不安にさせてしまい申し訳ない」
頭を下げて謝罪する彼のつむじを見て、一瞬呆気に取られ止まった思考を引き戻し、私は椅子から立ち上がって口を開いた。
「どうか顔を上げてください。此方こそ自己紹介が遅れてしまい申し訳ございませんでした。わたくしは、グレンドルグ王国クロイツェル侯爵の長女で、ルナティエラと申します」
挨拶の言葉を流れるように紡ぎ、できるだけ優雅な所作でカーテシーをして見せる。

頭の中が混乱していようとも、これぐらいはちゃんとやらないと今までどんな教育をされていたのかと笑われてしまう。
するとリュート様は、何かに引っかかりを覚えたように顔を上げて首を傾げた。
「侯爵令嬢……グレンドルグのルナティエラ・クロイツェル？」
どこかで聞いた名前だと彼は呟き、形のいい顎に大きな手をあてて考え込んでいる。
もしかして、私が知らないだけで、ルナティエラの世界にはこれだけの技術を持った国が存在したということ？
まさか……と、何度も瞬きを繰り返していると、彼は大きく目を見開いた。
「思い出した！　『君のためにバラの花束を』とか言う、タイトルの割に生々しい恋愛小説に出てくる悪役令嬢の名前と一緒じゃねーか」
「……それは、此方でも流行っているのですか？」
「いや、ここじゃねーけど……え？　『此方でも』？」
怪訝そうに見つめるリュート様に、失言だったかと考えたが、やはり確認はしておきたい。私はドキドキしながら口を開く。
「ここは……『地球』ではないでしょう？」
「はっ!?」
ガタリと音を立ててリュート様が椅子から立ち上がる。驚きすぎて次の言葉が出てこないようだ。

地球という言葉を聞いてもなんのことだか分からないという顔をせず、混乱する彼を見つめながら、私は予想が間違いではなかったことを確信した。

彼も私と同じ境遇なのだと——

この反応から見て、間違いはないはず。

問いかけの返答を辛抱強く待っていると、彼はかすれた声で呟く。

「そうか、そういうことか……アンタも、転生者なんだな」

私と同じ結論を導き出したらしい彼が、絞り出すように言った。

それに頷き、私は小さな声で続けた。

「はい、そうです。……先程『中世ヨーロッパ』とおっしゃっていた時から、もしかしたらと思っておりました」

私の言葉に苦笑して、リュート様は椅子に座り直した。

色々疑問に感じていたことが氷解し、緊張していた体から自然と力が抜けていく。

つまり、この世界は全くの異世界で、彼は同じく地球の日本から来た転生者であるということだ。

目の前の彼が自分と同じ境遇であることで、心に抱えていた孤独のようなものが消え去ったような気がする。前世の記憶を思い出してからというもの、心休まる日などなかったのだ。

少なくともリュート様は、転生者である私の状況を正しく理解してくれるだろう。今の私にとって得がたい味方であると直感的に感じたのであった。

さて、私の方はそんな風に安堵しているのだけれど、彼の方はというと苦悶の表情で頭を抱えている。

何にそれほど苦しんでいるのだろう。もしや私の存在が邪魔なのでは……と不安になったが、その答えはすぐに分かった。

「やべぇ、同じ転生者を召喚とか、俺ってヤツは何やってんの……！　しかも、思いっきり意思疎通のできる人間で、全然召喚獣じゃねーだろ！」

うがあああぁっ！　と吼えながらリュート様が頭をかきむしっている。意図的な行いではないことは先程聞いたし、あの状況から救い出されたのだから私には感謝の気持ちしかない。それに、あの時彼の手を取ることを選んだのは私自身なのだから、彼だけが責められることではない。

そういった諸々のことをどう伝えようか……と、頭を抱えたまま苦悶する彼を見ながら考えていたが、ハッとする。

『召喚獣』というのだから、召喚主の命令に従い任務を果たす必要があるのかもしれない。それなのに、なんの役にも立たない私が来てしまって……多大な迷惑をかけているのでは？

申し訳なさに胸中で悲鳴を上げながら、慌てて頭を下げる。

「すみません！　私みたいな者が来てしまいまして……」

「は？　いや！　そうじゃなくて！　アンタが来たことに対して責任が発生するのは俺であって……」

「いいえ！　あの時、貴方の召喚術は私に選択権をくださったのです。言葉はございませんでしたが、手を差し出して、私に来るかどうかを問うてくださいました。私はその手を取って此方へ来たのですから……」

「いや、俺が気になったところにいきなり大量に魔力を流し込んだから、選択肢があったかどうかすら怪しい。アンタが拒否していても、無理矢理連れてきた可能性だってある。本当に申し訳ない！」

「や、やめてください！　頭を上げてください！　私は貴方の召喚で助かったのですから！」

ガバッと勢いよく頭を下げる彼に驚き、叫ぶように言う。どうか顔を上げてと懇願すると、彼はゆっくりと体を起こしポツリと呟いた。

「ん？『助かった』……？」

それから私のドレス姿をまじまじと見つめて目を見開く。『君のためにバラの花束を』の最後を思い出したのかもしれない。私は頷き、彼に説明をする。

「はい、セルフィス殿下に婚約破棄をされたところでした。召喚で此方に来なければ、兵士たちに捕らえられ、最終的には国外追放か極刑になっていたはずです」

「ルナティエラ……アンタは話にあったような行いをしたのか？」

「物語にあったような真似はしておりません。ヒロイン……ミュリア様を見て前世の記憶を取り戻し、自分の身に破滅が迫っていると分かってからは、周囲や自分自身も怖くて誰にも近づけませんでした」

「冤罪かよ……」

苦虫を噛み潰したような顔をした彼の呟きを聞きながら、私はパーティーでの断罪を思い出し、改めて身震いした。

「極刑はもちろんだが、国外追放も『あの小説』では死を意味していた。酷いことを……」

「そういう事情ですから、本当に助かったのです」

「助かったかどうかは、まだ分からないだろ？　俺が悪いヤツだったらどーすんだよ」

「本当に悪い人は、そんなこと言いませんもの」

リュート様の言葉に首を振る。

記憶を取り戻してからというもの、心を蝕む恐怖と戦う日々が続いた。それは身の破滅が迫っていることへの恐怖だけではない。前世の記憶が戻った弊害とでも言うのだろうか……前の人生の両親と兄の愛情を思い出したために、家族のルナティエラに対する冷たい態度に愕然としたのである。

孤独が当たり前だったルナティエラとは違い、前世の私は、孤独や両親からの無関心があれほどに辛く恐ろしいことだと知らなかったから……

それからは、私をいないものとして扱う両親も、私と婚約が決まってからさらに疎遠になった婚約者も、冷たい目で見てくる周囲の人々も……すべての者が私の身の破滅を望んでいるのではないかと、恐怖に怯えていた。

「……大丈夫か？」
彼の言葉に自分が下を向いていたことに気が付く。慌てて顔を上げて笑顔を作った。
「ほら、優しいではありませんか」
召喚されてからの短い時間だけど、リュート様は非道なことを行うような人間ではないと自信を持って言える。彼の立場を考えれば私みたいな召喚獣は困るだろうに、必死に助けてくれたり、色々考えて気遣ってくれたりと、むしろお人好しと言える部類だろう。
そもそも彼が本当に悪い人なら、襲撃の時に私を全力で守るなんてしなかったはずである。
すると彼は「そうか」と呟いて困ったように微笑み、天を仰いだ。
何かを考えている素振りに、私も口をつぐむ。リュート様は腕を組み、天井を睨みつけてしばらく思案していたが、やがて視線を私へ戻して口を開いた。
「今までの話をすべて踏まえた上で、今後の話をしたい」
何かを決意したような強い瞳がまっすぐ私を捉える。彼は、この短時間に何を考え、何を決意したというのだろうか。そんなことを考えながら、彼の次の言葉を待つ。
「さっきまでは帰してやれるなら……と思っていたが、そういうことなら話は別だ。ルナティエラ、俺とこの世界で一緒に過ごしてくれないか」
思いがけない言葉に驚きを隠せず、目を見開く。そして、彼の瞳を見て息を呑んだ。
宇宙に浮かぶ地球のようなアースアイが、決意を込めて此方を見つめていたからだ。その瞳の色

に、心臓が変に動き出して脈が速くなる。それは怖いからということではないし、驚いたからというには奇妙だ。
彼の目をまっすぐ見つめ返しながら、私は今までこんな熱を帯びた視線で見つめられたことがあっただろうかと考える。優しくも強い想いが宿った瞳に涙腺が緩みそうになり、慌てて下を向いたけれど間に合っただろうか。
私のことを心から案じてくれている眼差しが、今そこにあった。
黙り込んだ私にリュート様が続けて言う。
「面倒を見るのが召喚主の責任だからこれくらいじゃ足りないかもしれないが、この世界での衣食住はすべて俺が負担する。……それに召喚獣として以前に、そんな顔で過去を思い出すやつを、俺は元の世界に帰したくない」
次の言葉が出てこない。
それに、召喚獣というものもよく分かっていないのだ。軽々しく頷いて、迷惑しかかけないと分かっている。
すると、私の不安を見透かしたようにリュート様が言った。
「もちろん、ただの善意だけじゃない。アンタには半年後の試験に一緒に参加してもらいたい」
「試験……？」
「そう。俺たちは召喚し、契約した召喚獣をパートナーとして、課題をクリアしていく必要がある」

先程の目まぐるしい戦闘を思い出す。戦いの心得一つない私には何もできないだろう。

戦いなど無縁の世界に生きてきたのだから、当然といえば当然ではあるが。

「残念ながら、お役に立てそうにありません。魔法なども使えませんし、先程の戦闘のように足手まといになってしまいます」

「いや。召喚獣は確かに戦闘系スキルを持ったモノも多いが、必要とされるスキルは戦闘能力だけじゃないから心配しなくていい」

半年後の試験……彼にとって本当に私がパートナーでいいのだろうか。

不安になってやはり返答できずにいると、彼はさらに口を開き、自らの事情を説明してくれた。

「元々俺は、召喚術師を目指して訓練していたわけじゃない。騎士科の中で魔法騎士としての修練を積んでいた一環で、召喚術師としてのスキルに目覚めたんだ。……自慢じゃないが、俺は大抵の召喚獣よりも強い自信がある」

確かに、先程の攻撃を避けていた身体能力といい、結構な火力を瞬時に無効化した手腕といい、その片鱗はあった。

でも、それならなおさら私のような役に立たない召喚獣なんていらないのでは？

そう思ったのに、リュート様は改めて私に向けて頭を下げた。

「頼む、俺と契約してくれないか。アンタを召喚獣として使役することはできる限りしないし、俺はアンタと対等に接したい。でも、この世界のシステムがそれを許してくれないから……令嬢として生きてきたアンタには抵抗があるかもしれない。でも、元の世界に戻してアンタを死なせることも、この世界で死なせることも俺はしたくない」

「リュート様との契約が嫌で渋っているわけではありません。むしろ反対です。リュート様が出してくださった条件は、私に都合がよすぎるものばかりで困惑しているのです。私にそれだけの価値は……」

「ある！」

価値はないと言いかけた私の言葉を遮（さえぎ）って、彼は叫ぶ。

「……私は、どのような形でもリュート様のお役に立てないと思います……」

「いいや、そんなことはない。アンタにしか頼めないことがある」

今までと声のトーンが変わったと感じて彼を見れば、とても言いづらそうに眉根を寄せて口をもごもごさせている。どうしたのだろうと凝視していたら、観念したように、リュート様は呟いた。

「アンタと一緒に……色々話がしたい。俺たちにしかできない話、日本の話を」

その言葉は、かなり胸にくるものがあった。

前世の記憶、懐かしい記憶を共有できない辛さを、私は確かに知っている。そして、それを埋めることができるのは、同郷の人間——この異世界であれば私しかいないだろう。

それは、何も持たない私の唯一の価値かもしれない。

「アンタに価値がないなんて絶対にありえない。少なくとも、俺のこの空虚な心を埋めてくれる。

それはとても得がたくて……絶対にないと思っていた」
それは、私も同じだ。理解してくれる人などこの世にはいないのだと諦めていた。手をぎゅっと掴まれて心臓が早鐘を打つ。それでも本当に、それだけのことで彼にすべての面倒を見てもらうなど、許されるのだろうか。
そう思って彼を見上げると、リュート様はかすれた声で言葉を続けた。
「それに……俺のところにいてくれと願う理由は他にもある。怖がらせてしまうかもしれないから、本当は言いたくないが……とても重要なことだから聞いて欲しい」
リュート様は、真剣な面持ちで口を開く。
「この世界に召喚された召喚獣は、召喚主との話し合いで『契約』か『送還』を選択できる。しかし、どちらも選ばずに逃げ出した召喚獣は例外なく死んでしまうんだ」
「え？　死んでしまう……？」
驚いて次の言葉が出てこない私に、彼は丁寧に説明をしてくれた。
世界には、それぞれ世界ごとに様々な『理（ことわり）』が存在する。
たとえば、日本では魔法が使えずこの世界では魔法が使えるというような、世界を創るために必要となるルール——プログラムのようなものだ。
「つまりこの世界に違う世界の理（ことわり）で動くもの——召喚獣が入ってくると、この世界は『この世界にとって正しい理（ことわり）』で動いていないモノと判断し、排除しようとする」

「コンピュータのウイルスみたいなものでしょうか」
「うーん、ウイルスというよりは、世界のバグとして判断されると考えたほうがいいかな」
なんとか自分の中で噛み砕きながら理解しようと言葉に出すと、彼がより近い言葉を探してくれた。
「そのせいで別の世界から呼ばれた召喚獣はそのままにしておくと、だんだん弱っていってしまう。それを食い止めるために、召喚主は魔力を召喚獣に渡してこの世界に順応させていく。簡単にいうと、バグを修正するための修正プログラム——パッチ役を、召喚術師がするわけだ」
彼の説明でおおよそのことは理解することができた。しかし、それが事実だというのなら——
「リュート様の助けがなければ、私はこの世界に存在することも……できないのですか？」
震える唇を止めることができず、声も震えてしまう。
「そうなる」
リュート様は口元を引きしめて重々しく答えた。
「……存在するだけで、ご迷惑をかけるのですか？」
「そんなことはない。四ヶ月ほどの『魔力調整』で俺の魔力を介して此方（こちら）の世界のマナ——魂の器に馴染ませるからその期間だけだ。一生という話ではないから、そこは安心してくれ」
彼の言葉を聞きながら、胸の奥がチリチリ痛んだ。迷惑をかけることしかできない自分が不甲斐なくて苦しい。

返す言葉が見つからずに黙り込んでいると、彼が口を開く。
「俺はアンタがいいなら、そばにいたい」
すべての迷いを断ち切るように、リュート様が私の手を強く握った。切なさを滲ませた表情で乞う、まるで恋をしているように熱のこもった声は、私の頭を痺れさせ、他意はないと分かっていても胸が早鐘を打ち始める。
今はそれどころではないと気持ちを必死に落ち着け、彼の言葉に耳を傾けた。
「この異世界で、同郷の人間に出会えたこと自体が奇跡なんだ。そして、俺といることでアンタを助けることになるならそれ以上のことはない」
彼の言葉は、どこまでもまっすぐで……優しさと労りに満ちている。
本当にいいのだろうか。彼に迷惑をかけることしかできないのに……そんな言葉が頭をよぎるが、彼の覚悟を確かめ、私自身の覚悟を決めるために言葉を紡ぐ。
「ご迷惑を……かけてしまいますよ？」
「分かっているっていうか、世界のシステムだから仕方がないし、頼ってほしい」
「わがままを言うかもしれませんよ？」
「なるべく希望には沿うよう努力する」
「戦えませんよ？」
「俺が戦うから問題ない」

「お役に立てることも少ないですし」
「俺の心のケアというか、癒やし」
それって、召喚獣として正しいあり方なのでしょうか？
まだ迷っていると、突然リュート様が悪戯っぽい顔で言った。
「ルナティエラ、ゲットだぜっ！　とか言い出さないから」
「私はボールには入りませんよっ⁉」
脊髄反射で返すと、リュート様がふっと笑み崩れた。私も思わず笑ってしまい、お互いの顔を見合わせて再び笑う。
「そうだよ。俺、こういうのを求めていたんだよな」
「他愛ない会話ですね」
「そう、他愛ない会話。だけど……懐かしい」
「そうですね」
久しぶりに、こんなに笑った気がする。
卒業パーティーが近づくにつれ、どんどん私の表情はなくなっていただろうし、元々これほど笑い合えるような会話ができる人たちもいなかった。
本当に久しぶりに、何も考えることなく笑えたことが嬉しい。作り笑いでも愛想笑いでもなく、ただおかしかったから笑った。それが、とても嬉しかったのだ。

ひとしきり笑った後、そっと彼の手が私に差し出される。
いつの間にかリュート様は真剣な表情をしていた。そして、緊張を滲(にじ)ませながら低い声で言葉を紡ぐ。
「俺と契約してくれ、ルナティエラ」
もう答えは決まっていた。
それしかないと分かっているし、こんなに心穏やかな時間を共に過ごせるなら願ってもないことだろう。召喚獣というものは分からないが、それでも彼がこれほど真摯な態度で、私がいいと言うのだから、その言葉を信じたい。
現状ほとんどの場面で足手まといだとしても、役に立てる何かを探して見つければいいのだ。
そうと決まれば、先程までのプレッシャーが嘘のように消え、笑顔を返すことができた。
「はい」
あの光の中で手を取ったように、私は彼の手に自らの手を重ねる。
すると、重ねた手から黄金の光が溢れ出し、小さな星をちりばめたように四方へ散っていく。
私の返事を聞いてリュート様は微笑み、朗々と唱えた。
「我、リュート・ラングレイは、ルナティエラ・クロイツェルを専属召喚獣として契約する。主従ではなく、我が半身として求め、互いを支え助け合う存在として守り抜くと誓う」
彼の力強い言葉が響くにつれて、重なった手から溢れる光はどんどん強くなる。

全身になんと形容していいのか分からないほど、温かく優しいものがどんどん流れ込んでくる。
それは私の空虚な内側を満たしていくようだった。優しい陽光が照らすように、温かな光が私の内側に満ちていく。
ああ、これがリュート様なのだと感じて、満たされる幸福に酔いしれる。
確かに、私とリュート様の心が……、魂が触れ合った瞬間であった。
次第に握る手の力が強くなり、胸がじんわりと熱くなるのを感じた。見れば自分の首元から光が溢れている。陽光に似た黄金の輝きは、空中に何かの文様を刻み始めた。
リュート様と二人でそれの軌道を目で追う。刻まれていく優美で繊細な黄金に輝くハートのような模様はとても可愛らしい。
「それが俺とルナティエラの契約紋だ。俺と行(おこな)った契約から発生したにしては可愛らしい紋様だけど、よく似合ってる。ルナティエラは髪色が天色(あまいろ)で、目がすげー綺麗な蜂蜜みたいな色だから、黄金に輝いてピンクの粒子が散る紋様が映えるな」
まっすぐな瞳でそう言われて、頬が赤くなるのが分かった。
外見を褒められることはなかったから照れてしまう。それでも心の伝わった今は、彼の言葉が本心であると分かり余計に頬が熱い。
そうこうしていると光は窓から入る陽光に溶けていき、幻想的な光景が嘘のように静かな空間が広がった。これで契約は完了したのだろう。

立ち読みサンプル
はここまで